44　近代看護婦は終末期看護をどうとらえていたか（第1報）
── 8人が著した看護書から ──

上坂　良子[1)]，水田真由美[2)]，松本　知子[1)]
[1)]看護史研究会，[2)]和歌山県立医大保健看護学部

海外からもたらされた新たな教育による近代看護婦の誕生は，1888（明治21）年，有志共立東京病院看護婦教育所，京都看病婦学校，桜井女学校附属看護婦養成所の卒業生らに始まり，帝国大学医科大学・日本赤十字社・聖路加病院の養成へと続く．やがて，卒業生の中から「看護書」を出版する者が現れ，現在判明しているのは8人である．彼らは看護の実践を重ねた結果，最大の関心ごとであった感染させない技術的方法や病人を回復させる経験知を獲得し，役割として他者に伝えたいと出版行動を起こした．目的は，国民の脅威であり死者数甚大な急性伝染病看護法の総合的な予防・対処法や伝染病以外の普通病の看護法を，病人の家族，看護職の養成・実務に役立たせることにあった．

研究目的：医制100年史による明治・大正期の急性伝染病死者数は，1886（明治19）年に15万人を超えるピークがあり，その後，年間2～6万の間を増減しながら昭和初期まで続いている．死者は急性伝染病だけではないのだが，近代の看護婦・看護人らは，終末期の病人をどのように看護していたのであろう．また「看護書」にはどのように記述されたのか．中でも，油川太嘉『八種伝染病看護法』（1901）は，終末期の病人に対し一人の人間としても対峙している状況や斬新な看護観を提示していることに関心が湧き，他の著者らにも共有されているのかどうか，文献調査を試みることにした．

先行研究：終末期の看護として「危篤」「臨終」「死の判別」「死後の処置」等，分析例は見出せたが，病人と看護婦・看護人の人間関係に着目した研究は検索できなかった．

用語としての「終末期」は現代用語である．8人の「看護書」には記述されていないが，「終末期」に相当する状況・場面は，ペスト・腸チフス・赤痢・コレラ等急性伝染病罹患者の重症・重篤・危篤・臨終など，看護書では短時に死に至る状況に相当すると考えた．

結果・考察：4人の「看護書」を中心に共通性を検討した．看護婦らは派出あるいは避病院内で病院の傍らにあり，指示による医学的処置，生活支援（安静・食事・排泄・清潔・環境整備等）を実施し，心身の回復過程に関わる密度は高いことが知られている．田中定（『八種伝染病看護法』1897　京都看病学校），大関和（『派出看護婦心得』1899，『実地看護法』1908　桜井女学校附属），清水耕一（『新撰看護学』1908　日本赤十字社）らの共通点は，「看護婦・看護人の心得」としての看護観（危篤重軽症問わず病人に対する看護の倫理的規範）が基盤にあり，看護婦らの言動規範となることが示されている．「及ぶ限りの親切なる心と言行を以て苦痛を慰め，病人の信用を得るようにし，生きる望みを断たれた時は寧ろ静かにすべし」。そして「安然（全）の終命を遂げしむべし」と。油川太嘉（日本赤十字社，後に医師）は，8割の病人が事理不明のまま避病院に搬送されるため「反復慰論法（強制隔離された病人の精神的苦痛反応に対話を用いたストレス軽減法）」が必要であるとし，「天国に近かんとするに及んでは須らく懇慰愛憐只管ら甘瞑するの法を講ぜざるべからざるなり。之れ看護の最も秘術とする所なり」「看護婦の最大要素は慈愛の二字に外ならず」「看護婦は時としては僧侶となりて因果を説き牧師となりて福音を説き祗司となりて天道を説き，手段と方便とを尽くして以て甘瞑せしむるを要す」とさらに踏み込んだ提言をしている。

結論：終末期看護について，「安然の終命」「甘瞑は看護の秘訣」の2点が抽出された。